＝前回までのあらすじ＝

「説明しよう、言弾遣いとは、言葉に宿る力、則ち言霊を銃弾に込めてそれを操る者の総称である。

ここ、言葉の国（ランゲアゲ）は言霊の力が比較的強い地であることから、言弾遣いが多く、育成校や管理本部もしかれている。

そのランゲアゲのプレイネ地区第六言弾専門学校を、喧嘩の流れ弾という馬鹿げた理由で大破させてしまったのは、その生徒であるところのおさななじみ、悼颯火（いたみそうか）と弔祇葬屋（とむらぎそうや）。彼らは罰として遠方のキンディネスに飛ばされ、そこで原因不明に大量発生した悪言（悪い言霊の塊、悪霊のようなものである）の退治を強いられることになる。…あー、んで、まぁ色々あって、幼なじみ同士の素敵☆絆パワーで事件を解決した二人は、元気に悪態をつきながら学校への長き道のりを地道に歩んでいるのだった！！　以上、前作『叫べ！』のあらすじでした！」

「うぉい、長台詞お疲れ様と俺にしては珍しく手前を労ってやろうかと思ったけど、最後の方飛ばしすぎじゃねェ？　前回のキーマンな琴樹のこの字もでてないじゃん」

「しかたねぇだろ！？　もともとこれ、続く予定じゃなかったんだしよぉ」

「新入生歓迎号なのに、文化祭ネタひっぱってくる時点でダメだよな…」

「そう、だから粗筋が残念なのも仕方がないと言うわけさ、颯火！」

「いいかんじにまとめようとしてるけどごまかされないぞ、葬屋！」

「と、いうわけで本作主人公こと弔祇葬屋だ」

「同じく地味な葬屋より確実に主人公らしい主人公こと悼颯火だ！」

「……颯火、俺達ちょっと話し合う必要があるようだな。主に拳で」

「はっはー、いつもの軽口じゃないですぎゃひッ！」

「急遽連載ものとなったので多少あらすじを入れてみたが、まぁ分からないところがあるのはご愛嬌ってやつだ。分からなくてもテンションとかそんなので乗り切れる仕様になってるはずだから気にするな」

「平然とチュートリアルしてるけど、殴りやがったよこいつ！　ライフルで！　重いっきり！！！　俺のすねを！！！！」

「はっはー、いつものツッコミだろー」

「Ｄ∨の間違いだろ！　言弾遣いのくせにそれもわかんねぇのかよカス！」

「ンだとこの頭弱い感じが滲み出てるぼんくらが！」

「へっぽこスナイパーはすっこんでろ！」

「行き当たりばったりガンナーは黙れ！」

『んだとてめぇ！死ｎピー《しばらくおまちください》ー』

と、そんな馬鹿野郎どもが馬鹿みたいに馬鹿騒ぎしまくる馬鹿話！

ＧＵＮ×ＧＵＮ☆ＢＡＮＧ×ＢＡＮＧ言葉遊び系ハイテンションガンアクション！

短編で終わると見せかけて（呼ばれてないのに）帰ってきました！

学校に帰るまでがお仕置きですよ☆

言弾シリーズ第二段！

嘆け！

この作品はご覧のテンションでお贈り致します。

И

青々と繁る森のなかを、土色鮮やかな道が通っている。木々の向こうに青白く聳える山々が美しく、鳥の囀りが耳に心地よい。そんなのどかな景色の中を、学ランとブレザーという決して似つかわしいとは言えない格好の二人一悼颯火と弔祇葬屋が、言葉の国へ帰らんとゆったりのんびり歩いていた。

キンディネスで悪言の大量発生をどうにかこうにか解決したのは二週間も前のこと。彼等のラングアゲを目指す旅はもう十五日目になっていた。

と、長い間地図と睨めっこしていた葬屋が唐突に言った。

「颯火、颯火。ちょっと全俺が泣いた的哀しい話しようぜ！」

「……どうした葬屋。初っ端から気持ち悪いテンションで」

…どうやら、第二章始まって間もなく葬屋のキャラが崩壊しかけているようだ。嫌な予感しかしない始まり方である。

「あれか、寝不足で逆にハイになってんのか？　んだよ、さっき乗せてもらったトラックで十分寝たじゃねェかー」

よく寝たなァ、と暢気にあくびをする颯火。

「そう、そのトラックのことなんだけどさ、俺達をラングアゲとはまるで反対方向に送り付けてくれたらしいぞ」

「へぇ…」

心地よい爽やかな風が二人の間を吹き抜けていった。

一瞬の静寂。

「…って、ちょ、待てぇええッ！　今ナチュラルに悲惨なこと言わなかったかァ！？」

ワンテンポ遅れて、颯火は全身全霊でツッコんだ。

嫌な予感、早速的中である。

「や、だってどう考えてもこのラングアゲの近くじゃないだろ。ラングアゲって都市だし。首都だし。青くも美しい山とか見えないし」

そう、彼等の故郷かつ目的地であるラングアゲは様々な小国が集うこの大陸のリーダー格、と言ってもいいほど発展した国であり、葬屋達はキンディネスから荷馬車等を乗り継ぎ、ラングアゲ隣接国のニアラまで来ていたはずである。そこからさらにトラックに乗ったのだから周りがこんな大自然なのはおかしいのだ。

つか、それくらい気付けよ。

「え！？　じゃあ何か！？　俺達はあのトラックのおっさんに騙されたってのかァ！？」

「ん、それなんだがな。お前、トラックの運転手の顔、よく思い出してみ？」

『よぉ、そこの餓鬼ども！　ラングアゲに行くのか？　よし、連れてってやろうからさっさと乗れ！　しばくぞ！』とか、気さくに声をかけてきた運転手。あの言葉遣いの悪さ、前章冒頭とデシャブを感じるが…

「…あ、阿部じゃん。どうみても阿部教官じゃねぇか」

阿部猛。二人の母校、プレイネ地区第六言弾専門学校の教師であり、その厳しい指導から、阿鼻叫喚という二つ名を持つ男である。二人を遠方キンディネスまでテレポートという名の強制送還させたのも彼だ。

「俺達が帰ってくるのを妨害しようとしたんだろうな。死ねばいいのに…」

「嘘だろぉおおおおおお！？」

憎たらしいほど青い空の下、仲良くうなだれる二人。

つか、それくらい気付けよ。

いや、それより、その原因が自分達にあるということに気付けよ。

「え、じゃあ、紅茶をもらった後、異常に眠くなったのも！」

「睡眠薬だな」

「ちなみに、今ここ何処！？」

「ファーラ。東部の山間農業地域。ちなみにラングアゲからはキンディネスより遠い」

「阿部今すぐ箪笥の角に小指をぶつけて死ねぇえええええ！！」
そんな無茶な。
「また地道にヒッチハイクの旅かぁ…何日かかることか…」
「なんかもう、開き直って旅に出た方が面白い気がするよ、俺！」
「金ないけどな、颯火！」
「一文無しだな、葬屋！」
「えっと、そんなことより、近くの村まで行って今夜の宿を探しませんか？」
「だな。まずはそこからだ。野垂れ死にしたら意味も未来もねぇし」
「地図によると、このまま行けば夜には農村に着きそうだぞ」
「よし！　そうと決まれば先を急ごうぜ、葬屋！」
「まったくだ！　善は急げってやつだな、颯火！」
「それじゃ、出発しｙ

「「って、誰だよお前はッ！」」

ビシィイ、と葬屋と颯火は息のあったツッコミと共に、勢いよく振り返ると、そこには小柄な少年が一人無邪気にキョトン顔を浮かべていた。右目には物々しい眼帯、腰まである髪を三編みにして結ってあり、服装も辺りの農村から抜け出して来たそれとは掛け離れている。いかにも訳ありな雰囲気を纏った少年、超☆無拍子登場である。
「何ナチュナルに会話に参加してんだよお前ッ！」
「うっかりノリツッコミなんて俗な手法使っちゃったじゃねぇか！」
「えぇ、そんな…あなた達がトラックを降りてからずっと後ろにいたのに…っ！？」
「「知ってるよッ！！」」
物語当初からの長いノリツッコミだったようだ。

「うぅ…知ってたらなんで何も反応してくれないんですか！？　僕の影が薄いからですか！？　僕が根暗だからですかぁああ！？」
「黙れストーカー！」
「静まれ新キャラ！」
「ひぃっ！？」
少年のネガティブな台詞もすごい勢いで一蹴。存在全否定である。流石の少年も、目に涙を浮かべながら押し黙ってしまった。
「ったく、面倒臭いのがついて来ちまったな、葬屋…」
「まったくだな、颯火。…で、お前は誰なんだ？　こんな田舎の片隅でチビが一人で何してんだよ」
返事はない。口をぎゅっと閉じて黙りこくっている。
「ほらぁ、葬屋があんな怖い顔でどなるから黙っちゃっただろー」
「お前が初対面のガキをストーカー呼ばわりするからだろ！？」
「俺は悪くないねっ！」
「俺の所為ではない！」
二人は静かに数秒睨み合うと、互いに頷きあい、黙りこくっている少年に目を向けた。
「で、いつまで黙ってるつもりだよお前！　さっさと喋んねぇと太腿ぶち抜くぞ！　あァン！？」
「命が惜しけりゃ全部ゲロっちまうんだな！　俺達は我慢強い方じゃないぜ…うっかり撃っちまうかもしれないぞ？　えェ？」
「ぎ、ひぃ、ひゃああああイヤですううううう！！」
不良よろしくな勢いで全力で少年を恐喝する二人。主人公にあるまじき悪人っぷりである。あ、今更？　ですよねー。

「喋りますよもう……、うぅ……さっき黙れって言ったから黙ってたのに…」
「「いいから喋れって言ってんだろうがッ！」」
「ひぃッ！？」
柄の悪い野郎に脅され、少年は恐怖にガタガタ震えながらも口を開いた。
「僕は互井、互井蒼慈（たがいそうじ）っていいます。あの、実は追われてて、二人に助けてほしいんですけど…」
「「はぁ…」」
風が、凪いだ。
一瞬の静寂。
「「って、ぇえええええッ！？」」
「ふつつか者ですが、よろしくお願いします！」
「「それ違ああああああうッ！」」
悲痛なツッコミが、爽やかな空にこだました。

И

「さて、そろそろ説明してもらおうか、蒼慈」
「ぁあ…はい……」
蒼慈は葬屋と颯火の致死性のありそうな視線を受け、震えながら頷いた。
「実は僕、タームに収容されていたんです…」
「はぁ…」
ターム。ニアラにある問題児収容所である。
言霊は言弾として力を作ったり外界に影響を与えるように、それを使う人間にも少なからず影響を与える。強力な言霊を扱う者となれば尚更である。そうすることによって人格が破綻してしまったり、暴走してしまったりした者を収容し、矯正していくのがタームである。問題児の集まるという、少年院的な場所ではあるが、一方で強力な言霊を扱う者達が集まる、エリート用の研究施設のような一面もある特殊な機関だ。
つまり、この少年、蒼慈もなかなかのつわものであり、また、過去に相当な問題を起こしたということなのだが、二人のツッコミやリアクションが入る気配は無いようだ。相変わらず鈍い。
「そこで、僕は矯正を受けて、すぐ出られるはずだったんだけど、突然変な実験に参加されちゃって…。もう嫌になって逃げ出して来たんだ。だからその、逃げるの、少しだけでいいんで手伝ってくれませんガハァッ！！」
「お前の素性なんて聞いてねぇええ！！」
煌めいた銃身！　弾ける火花！　ガコーンッ！！
葬屋の容赦ない一撃が蒼慈の頭に炸裂した。超良い音。
当たり前のことだが、ライフルは撲殺用の道具ではありません。
「な、何するんですかぁああッ！」
痛みに悶絶しながら泣きじゃくる蒼慈。しかし、そんな蒼慈に一瞥の同情も見せない冷たい表情で、葬屋と颯火は言った。
「お城から逃げ出したお姫様的ドラマチックストーリーはどうでもいいんだよ！」
「ど、どうでも良くないし！　ぼ、僕、男だしっ！」
「そもそもショタ属性な仲間とか受け付けてないんだよ！」
「ショタ…ッ！？」
「正直、これ以上『そう』のつくキャラが増えても困る！」
「そうだそうだ！　もう一人増えたら『そう』が四つで『ＳＯ４』（硫酸）になっちまうぞ！」
「それ、四つなのはＯだｋ…」
「いちいちうるさい！　このぼんくら！」

「少しは黙ってろよ！　眼帯おさげめ！」
「ひぃ！」
まるでまともに喋らせてもらえない新キャラ、互井蒼慈。
参戦早々、扱いが残念なことになっている。
「つか、俺達が聞きたいのはなぁ…」
葬屋はライフルを地面に突き立て叫んだ。
「何で俺達は日が暮れてもこんな森ん中にいるんだってことだよッ！！」

現在位置・月明かり眩しい暗い森のど真ん中
『このままっすぐ行けば日が暮れるまでに村につけるな』
ＢＹ葬屋　ＡＴ数時間前
……あれ？
「お前が『**僕この辺りの地理には詳しいんです！　こっちの森を突っ切っちゃった方が早く村に着くよ！**』とか言うからッ、わざわざ進路曲げて森に入ったのに！」
「……、**えへ、間違えちゃいましギャフッ！**」
「**えへ☆**って、可愛いとでも思ってんのかァ！！」
「ひぃイギャァッ！！」
颯火のハイキック、クリティカルヒット！　蒼慈に1268のダメージ！
泣きそうな少年をよってたかってたこなぐりするのを、世間ではリンチって言うんですよ、二人とも。
「まぁ、すぎたことは気にしないけどよ…、なぁ？　葬屋」
「ああ、もうどうしようもないことだしな、だろ？　颯火」
マジ蹴りマジ殴りした奴の言うことではない。
「そういやお前、言弾遣いなのか？」
「ふぇ？　…あ、そうですけど……」
「へぇ、ま、でも銃がないんじゃ足手まといになるなぁ、葬屋」
「だな、やっぱり俺達だけで行くか、颯火」
「…？　行くって何処へですか？」
「食料調達に決まってるだろ？」
不思議そうな顔の蒼慈に、葬屋と颯火は各々の銃を手に答えた。
無一文で旅をしていた彼らは、どうやら狩りをして食いつないでいたようだ。狩りといっても、悪言の言霊を具現化するエネルギーを利用して、食べ物を作り出すという、言弾遣いならではのものだが。
「つーわけで、俺たちのいない間にいなくなってしまえ」
「大丈夫、絶対探さないから」
「えええ！？」
「あばよ！　お前、いいストレス発散になったぜ…！」
「タームでも元気でなっ！」
「ど、何処にも行きませんよッ！」
「うわっ、マジかよ」
「お前、空気読めよ」
「ううううう、は、早く帰って来て下さいよーっ！！」
颯火と葬屋の暴言に泣きそうになりながら、蒼慈は消え行く二人の背中に叫び、薪に点された炎に小さくため息をついた。
「早く、戻って来てよ…兄さん……」

「俺は眠くない眠くない眠くない眠くない眠くない眠くない正直眠いけど眠くない眠くない眠くない眠くな…」

葬屋と颯火が『兎美味しいか野山〜♪』とか歌いながら狩って来た兎を蒼慈が一匹逃がして良い感じにぼこられたりしつつ、美味しくいただいた後、一行は交代で見張りを立て、眠りにつくことにした。

独り、睡魔と戦う葬屋の声に目を覚ましたのか、蒼慈は起き上がり、寝ぼけた声で葬屋に問うた。

「…葬屋さん、何をぶつぶつ言ってるんですか？」

「自己暗示かけてるんだよ。眠くない眠いようだが眠くない眠くない寝ない寝たいやってられない…」

その自己暗示が途中から破綻している。

「そんなに眠いなら、僕が代わりますけど…」

「お前みたいなもやしで見るからに弱っちいのに任せられねぇよ。悪言に飲み込まれて一貫の終わりだ」

「も、もやし……」

酷い言われようである。

「そういえば、悪言に飲まれるとどうなっちゃうんですか？」

「お前、言弾遣いなのにしらねぇのか？　悪言と同化して消えるか、精神を悪言に浸食されて狂人の出来上がりだ。そんなの俺はごめんだな…」

ふわぁ、と大きくあくびをして、また『眠くない眠くない…』と呟きはじめる葬屋。

そこで、ふと、蒼慈の眼帯に目を向けた。

「お前、それって何でつけてんだ？　怪我でもしてんのか？」

「いいえ、僕もよくわからなくて…。研究の間に無理矢理つけられたものだから…」

「無理矢理か…、外れるのか？」

「みたい、ですけど…、外すの、手伝ってくれますか？」

「ん、え、まぁいいだろう…」

このままぼーっとしていても睡魔に負けると思った葬屋は、曖昧に頷いた。

「ところで、葬屋さんと颯火さんって仲良いんですか？」

「あ？　良くはねぇな…、よく殴り合いとか撃ち合いとかするし…」

そして、うっかり校舎を壊したりするし。

「なら、颯火さんの愚痴とか悪口を思いつくままに言って下さい！」

「はァ？　なんでだ？」

「いいから！」

笑顔で急かす蒼慈に、まぁいいけど…と、葬屋は一つため息をついて、日頃の鬱憤を語りだした。

「あいつとは幼なじみで小さい頃からよく一緒にいるんだけどどうにもムカつくんだよなぁ。頭悪いし俺の話きかねぇし猪突猛進な馬鹿だし阿呆だしボンクラだしへっぽこだしやってらんないしチキショウ！！　ちょっと見てくれがいいからって調子乗りやがってあのピン留め野郎ッ！　目つき悪いよ悪かったな不良っぽくて！　分からないのかこの俺からにじみでる優しさのオーラ！　気付けよ！　避けるんじゃねぇ！　逃げんじゃねぇ！　死ねぇぇぇえ！」

「ひぃえっくしゅッくしゅんッはきゅしゅッ」

葬屋が愚痴を垂れ流す横で、くしゃみを連発する颯火。だが起きない。図太い。

まぁ、その愚痴も、最後の方は葬屋の虚しくも切ない絶叫となっていたが。

「はァ…、スッキリした…！　で、こんなんでそれが取れんのか———」

「はい、取れましたよ」

蒼慈が満面の笑みを葬屋に向けた途端、はらりと、蒼慈の右目を分厚く覆っていた

眼帯が力尽きたように剥がれ落ちた。
変わりに現れたのは、少年の透き通るような碧いそれとは違う、何もかもを吸い込んでしまうかのような漆黒の瞳。

と、不気味な紋様。

「っはは……おかえり、兄さん」

И

「――――ッ！？」
「いやぁ、お二人の悪口雑言のおかげで、悪言の力を強化させて内側から外せましたよ、この封印具！」
そう蒼慈が言っている間にも、不気味に黒い紋様は、右目から血のように這い出し、右頬、首筋、右肩、右腕と、その面積を広げていく。
「封印具、だと…？」
「言ったでしょ、僕はタームで矯正を受けたって。それですよ」
「でもお前は言弾遣いだろ？！　目を封印して何が…ッ！？」
「ああ、違います。僕はそっちのコトダマ遣いじゃない」
蒼慈は腰まである三編みをほどき、今までのそれとはまるで違う黒い笑みを浮かべた。
「『僕らは異なる魂を遣う者―異魂遣いだよ』」
俺達は異なる魂を遣う者―異魂遣いさ

声が、重なって聞こえた。
「『さぁて、久しぶりに娑婆（しゃば）に出たことだし、リハビリ代わりにこいつら軽くいじめようかなー』」
蒼慈…、いや蒼慈と同じ形の何かは大きくノビをして、
その直後には、葬屋の目の前まで迫っていた。
「な――ッ！？」
「『ハッ！　なァにボケっとしちゃってんの～ォ？』」
「――――ッ！」
黒い紋様の残像が走ったかと思うと、葬屋は大きく後方に殴り飛ばされ、木の幹に身体を打ち付けた。
「カッは…ッ！　お前っ！　何なんだ！」
「『いちいち五月蠅いぞ、お前。黙れ、平伏しろ』」
ドン、
と恐ろしい圧力がかかり、葬屋は地面に押し付けられ、まさしく、平伏する形となった。声も、出ない。
「――…ッ！　――――ッ！」
「『ハッハァ！　なかなか面白い格好じゃん！　何？　さっきまでボコってた小僧に負けちゃってちょっと屈辱的～？　はは、やべぇ興奮してきた！』」
ソレは恍惚とした笑みを浮かべながら、未だ眠っている颯火に近づき、袖から肉厚なナイフを取り出し、颯火の腕を撫でるように這わせた。
「『こいつ、親友でしょ？　はっ、やべ、超いじめたいなぁ！　指とか切り落としたら怒るよねぇ？　ははは！』」
「――――――――――――――ッッッ！！」
身動きも出来ず、声も出せず、止める間もなく、ソレは大きくナイフを振り上げた。

ダンッ

鈍い音が響く。

しかし、それは切断音ではなく、硝煙を纏った発砲音。

颯火のリボルバーがソレの右肩を捕らえていた。

「！」

「人が寝てるのに枕元でばたばたうっせぇんだよ！　あと、寝込みを襲うのはマナー違反だボケ！」

ダン！　ズダン！

続け様に二度発砲すると、ソレはナイフを手放し、肩を押さえながら仰向けに倒れた。同時に、ふっと葬屋を押さえ付けていた力が弱まり、ここぞとばかりに葬屋は颯火の元へ駆け出した。

「大丈夫か、颯火…！？」

「それはこっちの台詞だ、葬屋。いったい何があったわけ？」

「俺もよく分かんねぇけど…、簡単に言えば、ショタが眼帯とったら変態に進化した」

「なんだそりゃ」

…何も間違ってはいない。

「でも、お前、それ実弾だろ？　下手すりゃ殺人だぞ？」

「あっちは俺の指をちょっきんするつもりだったんだぜ？　正当防衛――」

『ちょっと、痛いじゃん。リハビリ中何だからお手柔らかに頼むよー』

「ちょっと、兄さん…ッ！　痛いのは僕なんだよ…？」

『いいじゃねぇか。どうせ根っこは同じだろ？』

「「はァッ？！」」

抜群のタイミングで共に声をあげる二人。

ムクリと起き上がったソレの右肩に、傷痕など残ってはいなかった。そして、その後ろには痛みにもがく蒼慈。

分かりやすい幽体離脱の図だった。

「あ？　あああああ？！　な、さっきっからどうなってんだ、これェ！？」

「おおお俺に聞くな！　一番驚いてるの俺だぞッ！？」

『俺、確かに当てた！　当てたはずだそのショタもどきに！』と慌てふためく颯火の横で、まるで頭が状況についていっていない葬屋。

『ははは、なんか間抜けでおもしろー』

「わ、笑うな！」

「ゆ、幽霊め！」

『幽霊か、あながち間違ってないけど、残念ながら俺は蒼慈の異魂。霜一（そういち）だ。これから、そこの村いじめに行くんだけど、くる？』

「「行くかよッ！！」」

ビシッ！と、こんな時でも息のあったツッコミ。

そんな『今からお茶する？』くらいの軽いノリで村を襲うのに誘わないで欲しい。

「つか、全然話が見えないんだけど…」

「お前ら、いったい何がしたいんだ？」

『はは！　そうだな、お前ら面白いから、俺達の話聞かせてやるよ！』

「兄さんがそう言うならそれでいいよ。これも何かの縁だしね」

「いや、俺らはお前らのスペクタクルストーリーに興味は…」

『寝ぼすけちゃんは黙ってな』

「―ッ！　――――――ッッ！？」

またも、蒼慈もどきー霜一の一声が声を奪う。

颯火は目を見開きながら、口パクパクさせて葬屋に訴えた。
「――――――ッ！　――ッ！　～～～～ッ！！」
「いや、それ俺もわかんねぇんだ。ほんと、異魂ってなんなんだ…？」
「――――ッ！」
「別にお前に聞いてねぇよ！」
「――――――！　――ッ！」
「そのままくたばれ！　颯火ッ！」
会話は成り立っていた。
…読唇術の心得でもあるのか、葬屋。
『まぁ、そうギャアギャア言うなって！　俺が話してやるってんだから、うっかり宗教開くくらい感激してもいいんだぜ？』
「開くかッ！」
「とにかく、そこで静かに聞いていればいいよ…」
二人は同じ顔でまるで別の笑みを浮かべながら言った。
『異魂遣いのハジマリをね』

И

「僕達はこの近くの、ちょうど葬屋さん達が行こうとしていた村に住んでいたんです」
『自分で言うのもなんだが、俺はなかなか言霊の才能に恵まれてよ、ずっと家に篭って研究にばっかりしてたさ』
同じ顔で代わる代わる話していく蒼慈と霜一。それを複雑な表情で正座して（霜一の指示）聞く葬屋と颯火。
「（何か大事になってきたなァ…、颯火…）」
「（ただ三編み少年拾っただけなのにな…）」
そんな二人の小さな嘆きは語り始めた蒼慈と霜一には届かない。
『言霊の研究しかしない俺は、変人呼ばわりされて廻りから嫌われてたさ。こっちの奴らは土耕したり食い物作ったり、言霊とは掛け離れた生活してっから気味悪かったみてぇだな』
「いや、その性格じゃ仕様がねぇだろう」
「生前の兄さんはもっと優しくて気が利く良い人だったんです！　異魂に使う言霊が悪言と似てるから、ちょっと性格が悪くなっただけだよ！」
余計な口を挟む颯火を蒼慈は睨み付けながら言った。
気の利く良い人がナイフ振り回す変態になるとは、悪言の影響も侮れないな…。
「それでも、皆、影で兄さんの悪口ばかり言ってたよ。調度いいストレス発散の道具になってたんだ…」
『ま、俺は気にしちゃいなかったけどよ』
はっ、と霜一は乾いた笑みを浮かべた。
『ただ、そうして俺が村の《悪者》に成り果てたころ、俺が蒼慈の他で唯一仲の良かった女が死んだんだよ』
「もともと病弱な子で、ついにその時が来てしまった、だけだったんですけど…ッ」
『いつの間にか、俺が殺したということになってた』
「「……！」」
悲しみにくれた人々は、そのはけ口を探し、揚句ソレに抜擢されたのが霜一だったのだろう。そして、誰が言い始めたのか分からないまま、噂は広がって行き、霜一への悪評は悪化の一途を辿っていった…
「なんで…、そこまで…」

『俺が人の魂を言霊と融合させ操る、異魂の研究してたからだろ？だから、俺が研究に使っちまったんじゃないかって思ったみたいだな』
「もう、村の人みんなが兄さんを嫌って…、いや憎んでた。『あんな奴は早く死ねばいい』って、みんな…」
『ここまで来たら分かるだろ？　何で俺がこうなったか』
「…ッ！　まさか…！」
「そう、兄さんは膨れ上がった悪言にやられて、死んじゃったんだ…！」
蒼慈は俯いて、唇を強く噛んだ。
「あいつらが、無知なあいつらが『死んでしまえ』なんて何度も言うから！悪言の病にかかって、兄さんは死んじゃったんだ！　だから僕は、兄さんの遺志をついで異魂遣いになった！　村の皆に思い知らせるために！」
『ま、そしたらタームに連れてかれちまったんだけどな』
目に涙を溜めながら叫ぶ蒼慈とは対照的に面白そうに笑う霜一。一方で、颯火と葬屋は真っ青な顔をしていた。
「お、おい、葬屋…、悪口で人は死ぬみたいだぞ…？」
「俺たち何回、『死ね！』って言ったっけ…？」
「数えてねェよ」
「そりゃそうだ」
「死んだらごめんな！　葬屋！」
「死んだらダメだぞ！　颯火！」
「大丈夫、俺本気で死ねとか思ってないからなあああああッ！」
「俺だって本気で死んでくれとか言ってねぇようおおおおッ！」
ガッと、泣きながら熱い抱擁を交わす二人。
超ごめんマジごめん死ぬなよ相棒おおおお！
仲が良いのか悪いのか…って、お前等、絶対仲良いだろ…
『というわけで、俺達は軽く村潰してくるから～』
「ええ、今度こそ村崩壊させてやります」
「「ちょっと待てよッ！」」
だから、そんな軽いノリで凄いこと言わないでいただきたい！
「僕のことは分かってくれたでしょ？　なら止めないでください！」
「いや、それとこれとは話が別だ！」
「人殺しに行くのをはいそうですかって流せるか！」
『なんだ、せっかくわけを話してやったのに、聞き分けの悪い奴等だな』
霜一は不気味に笑うと、すうっと蒼慈に溶け込んでいった。
「『やっぱり、いじめて黙らせるしかないかなァッ！』」
ダンッと地を蹴る音。霜一は勢いよく颯火と葬屋の真上に跳躍した。
「『動くなッ！』」
「！？」
とっさに避けようとした二人の動きが止まり、容赦ない蹴りが炸裂する。
「カッはぁ…！　さっきからどうなってんだこれ…ッ！？」
「『教えて欲しい？　異魂は魂を特定の言霊の力で留めたもの、いわば言霊の塊！　言霊が人の身体に与える影響を、俺は意図的作り出すことができるのさ！　人である限り、言霊には逆らえない！』」
「…ッそぉ！　なら、それを塗り替えるまでだッ！颯火！」
「ああ、葬屋！　《自己暗示》！」
そう言って、霜一がナイフを構えなおしているのを見据えながら二人は叫んだ。
「俺達は動ける動ける動ける動ける動ける動ける動ける動けるッ！」
「動ける動ける動ける俺達は動ける！　なぁ、葬屋！」

「当たり前だ！　颯火！　俺達が動けないはずなんて、ないッ！」
ばき、と何かが壊れる音がして、二人は同時に動き出した。間一髪で霜一の放った一閃を避ける。そして、すばやく引き金に指をかけ、銃口を霜一へ向けた。
「『はァッ！？　マジかよ！』」
「《走る痛みは主へと還る》！」
「レフタ《海戦山閃》！　ライティ《発砲美人》！」
バララララララ！
軽快な発砲音とともに、霜一はのけぞる。が、しかし、
『ざんね～ん！　異魂は言霊を全部吸収しちゃうよ～ッ！』
着弾直前に蒼慈と分離し、全ての言弾を吸い込んでいく。その間にも、ナイフを持った蒼慈が飛び上がり、二人に襲い掛かる。
「僕の邪魔をするなぁあああああああああッ！」
「しまっ……ッ！」
銃を叩き落され、蹴倒される颯火。あっと言う間に、首元には冷たいナイフが突きつけられていた。
「僕は！　ただ、兄さんの仇を討ちたいだけだ！『許してほしいなら泣いて許しを請えばいい！　己を嘆いてこの世を嘆いて運命を嘆いて、その嘆きが俺の力になるのんだッ！　ヒヒヒアハハハッ！』」
途中から霜一が憑依して、蒼慈の顔が嗜虐的な笑みへと変わっていく。
「『ほら、霜一さんごめんなさいは～？　今なら許してあげなくも…』」
「……もう、やめようぜ、そういうの」
颯火の言葉に霜一から笑みが消えた。
「もう昔の話はいいじゃねぇか。復讐なんてしたって、何も変わらない…」
ぽん、と颯火は霜一の頭に手を乗せて、
「お前等は、よくがんばった」
笑った。
「『ぅ…うあああああああああアアアアアアッ！』」
途端、霜一は苦しそうな声を上げて、颯火を押しのけた。頭をかきむしり、苦しそうに荒い息をしている。
「『だ、黙れ！　そんな言葉は要らない！　黙れええええええッ！』」
「…オイ颯火、お前何したんだ…？」
「いや、ちょっとしたギャグのつもりで、くさい台詞を…あれ？」
予想外の出来事に目を見張る二人。と、そこで、葬屋ははたと思い出した。
「そういや、こいつは言霊の塊で、しかも《嘆き》の力を使ってるんだよな…？　じゃあ、それと反対の言葉、言霊を吸収すれば…」
「相性の悪い言霊同士は反発して、暴発する…ッ！」
そう、言霊は《同じ言葉を繰り返せば力が強まる》ものであり、逆に言えば《反対の言葉を混ぜると力が弱まる》のである。
つまり、《嘆き》のような悲しみの言霊で出来ている霜一の中に、颯火の発した《慈愛》の言霊が混ざれば、拒絶反応を起こし、力を弱める！
二人は、顔を見合わせてにやりと笑った。
「行くぞ、颯火！　テーマコンボ！　《褒め言葉しりとり》！」
説明しよう。テーマコンボとは、同種の言葉を繰り返すことにより言霊の威力を高めていく、葬屋と颯火の得意技である。いかに上手くコンボを繋げるかが、この技の威力を左右することになる。
そして、《褒め言葉しりとり》とは…

「霜一、お前っ、本当に良く頑張っ『た』！」
「たいしたもんだ！　皆に嫌われて死ねとか言われてたのに『な』！」
「なのに、ずっと研究を続けて新しい言霊の使い方を作り出したんだ『ろ』？」
「ろくなことしてねぇその村の奴等とは大違い『だ』！」
「誰にだって出来ることじゃない『ぜ』！」
「全力で言霊を研究した男！　互井霜一！　カッコいいな、手前（てまえ）！」
　というように、相手を全力で褒めちぎりつつしりとりをするものである。
『ぐぁあああああああああッ！　やめろおおおおおおおおおおおッ！』
「ぎゃあああああああ！　兄さあああああああああああんッ！」
　頭を抱えて苦しげに叫ぶ霜一と、その姿に泣きじゃくる蒼慈。
　など、まるで気にせず、二人の《褒め言葉しりとり》は続く。
「永遠と馬鹿に楽しく生きてた俺達なんか足元にも及ばない『さ』！」
「最高に漢だ、霜一！　もちろん、それを支えた蒼慈『も』！」
「もう、誰もお前等のことを悪く言ったりする資格なんてな『い』！」
「今まで、悲しみに耐えて頑張った手前等を、俺は心から尊敬する『ぜ』！」
「是非、その強さの秘訣を教えてもらいたい『ね』！」
「願ってもないことだな、それは！　どうだ、教えてくれ『よ』！」
「よし、じゃあ、これからは霜一先生って呼ぶ『か』！」
「カッコいいな！　でも、師匠の方がもっとそれっぽ『い』！」
「いいな、それ！　尊敬すべき師匠、俺、どこまでもついていきま『す』！」
「すばらしい言霊新流儀、異魂遣いを編み出『し』！」
「死してなお、言霊に身を捧げ続け『た』！」
「「互井霜一さ『ん』☆」」
　キャラが崩壊よろしくな超無邪気な笑顔を湛えて、二人は霜一の手を握った。
『がああああああアアアッ！　お前等は、なげ、嘆…いていれ、ば……ッ！』
　ばたり。
　互井霜一、戦闘不能。
　まさに《褒め殺し》。
「兄さあああああああああああああああああああああああんッ！」
「はは、やったぞ、俺達言霊だけで相手を倒したぞ！」
「確かに、今言弾遣いなのに、全然発砲できてないな」
　爽やかに笑う二人の顔が、ぼろぼろ泣いている蒼慈に向いた。
「では今からここの生意気な小僧を虐めたおしたいと思いま～す！」
「賛成！」
「ひぇえええええええええええええええッ！？」
　ジャキッ、と二人は一斉に銃を構えた。
「だって始めにいじめてきたのはそっちだし～？」
「加害者のお前は文句はいいようがねぇよなァ？」
　完全に霜一のドＳっぷりがうつっている。
　真っ黒な笑みを浮かべる二人に、もう後ずさりしながら泣くしかない蒼慈。
「いいいいやだッ！　ぼっ、ぼぼ、僕は僕の兄さんを侮辱した奴等をこ、こらしめるためにここまできたんだ！　大人しく殴られてたのも、言霊の力を高めて、兄さんを解放するためなんだからああ！　うう、もういやだ！　いやだよぉおお！　痛いのはいやだあああああああ！　撃たないでお願い何でもするから見逃してえええ！　何でこんなことになっちゃったんだよおおお！　うわあああああああんッ！」
　蒼慈、超号泣。かろうじて残っていた威勢も消え去り、情けなく泣きじゃくり、己の身を嘆き続けるだけに…
　嘆き……

あ。

『霜一お兄さん、超☆復☆活―ッッ！』

「「出たあああアアッ！？」」

弟の嘆きパワーを吸収して、霜一完全復活。

調子に乗るからこうなるのである。やっぱり馬鹿だこいつら。

「ううう、兄さん！　こいつら僕をいじめてくるんだよ…！　もういやだよっ！」

『オイオイオイオイ、弱いものいじめとは情けないな～！　仕方ない、俺がいい感じに虐めて虐めて虐めて虐めまくってやるよ！』

「そ、そそそそ、葬屋！　テーマコンｂ」

『とりあえず、黙れ☆』

「「――――――ッ！」」

先手を取られた。

テーマコンボも使えない。自己暗示も使えない。

打つ手なし！

『さてさて、どうしてくれようかなぁ～♪　急所避けて切りまくろうかなァ？　それとも、操って殺し合いにさせようかなぁ？　どれが一番むごいかなぁ？　あはは！』

目を細め、プレゼントを前にした子供のように微笑む霜一。その不気味な様子を、ただ見ていることしか出来ない颯火と葬屋。絶体絶命。

『よし、きーめたっ！　とりあえず、四肢分解しよう！』

「「～～～～～～～ッッ！」」

よしじゃない！　とりあえずじゃない！

そんなツッコミを心の中で叫びながら、颯火と葬屋の短い人生は幕を閉じたのだった……。死ね死ね言ってた報いがこれです。これぞ、因果応報。

というわけで、言弾シリーズは主人公不在のため、シリーズになった途端お終いです。ここまで読んでくれてありがとうございました。

走狗先生の次回作にご期待ください！

「と、そう簡単には終わらないんだなー」

……はい？

ダンッ！

と、何処からともなく不気味な衣装を纏った少年が霜一との間に割って入り、ほうけた霜一の顔を大きな袖ですっぽりと覆ってしまった。

「『がぁ……ッ！　しまッ…！』」

「《　互井霜一、悪言識別番号S-0405　》《　憑依媒体より隔離する　》」

バチン！という何かが爆ぜる音がして、霜一、否、蒼慈はばたりと倒れた。

代わりに、少年が顔から手を離すと、袖の間からウサギの人形が落ちた。

「……はい？」

「いやぁ、ごめんごめん、来るのが遅くなっちゃってー」

そうへらへら言いながら現れたのは、パーティーにでもいそうな正装の青年。全く事態の飲み込めていない二人に、彼は人のよさそうな笑みを向けた。

「私はターム悪言研究科主任ゼペット・パペット。そこの脱走した子を連れ戻しに着たんだけど、遅くなっちゃった。足止めしてくれてありがとう」

「は、はぁ…」

迷惑掛けたどころじゃないからッ！
事態についていけなさすぎてこんなツッコミすら入らない。
「主人（マスター）、霜一の隔離、終わった」
不気味な衣装の少年は、そう言ってウサギの人形を青年＝ゼペットに渡した。
「ありがとう。もう、霜一くん、ダメだろう逃げ出したりしちゃあ」
『黙れ！　この悪言マニアめ！　お前のところは気色悪いんだよ！』
「「う、ウサギがしゃべって霜一だッ！」」
訳・手渡された可愛らしいウサギの人形が霜一の声で喋ったぁ！？
驚きすぎてもう日本語が崩壊している。
「ああこれはね、霜一くんをこっちに移し変えたんだ。この人形は悪言を捕獲する道具なんだよ？　可愛い上に、すごいでしょー？　私達が作ったんだよ？」
そこに可愛さは必要なのか。
「と、とにかく、手前がそいつを連れて行ってくれるんだな？」
「うん、ちゃんと持って帰るから安心していいよ」
ゼペットの笑みに、二人はやっと胸をなでおろした。
「そうか、よかった…。一件落着だな、葬屋」
「そうだな、もう少しで『そう』が四人で『SO4』になるところだったぜ」
「じゃあ、俺達は寝るんで」
「一睡もしてないんですよ」
「そう、本当悪かったね。ああ、でもあの子達は必要なくなっちゃｔ」

「ヒィイイイイイイイハァアアアアアアアアアアア――ッッ！」

「ハァ！？」

二人が寝ようとしていたところへ、ゼペットの後方から謎の奇声と人影が躍り出た。
「遠きも近きも音に聞けぇえ！」
「音斬風刃（おとぎりかざは）！」
「音斬雷人（おとぎりらいと）！」
「音斬兄弟ただいま参上ッッ！」
ビシィ！と、謎の双子、完璧なキメポーズ。
………しらけた。
「ちょ、何この空気！？　つか、もうそうちゃんズ処理済み！？　マジでーッ！？」
「ごめんねー、せっかくついて来てもらったけど、仕事は終わっちゃったよ」
「マジでええええ！？　もしかして、そいつらの所為ッッ！？　そうだろ！？」
「まぁ、そうだね」
「「じゃあ、俺達こいつらと勝負する！」」
「「はァあッ？！」」
突然、勝負を吹っかけて来たのは、ギターを背負い、左右対称に片目を隠し、目の下にタトゥーを入れた、超ハイテンション双子。
眠気もふっとぶ、わけなかった。
「葬屋、俺、もう同じ顔飽きた」
「奇遇だな、俺もだ」

《 言霊シリーズ！　次回は　『VS音斬兄弟』！》

《Endless…》